ストレイ・シープ

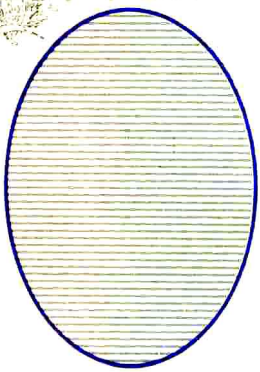
Stray sheep

中平まみ

ストレイ・シープ

Stray sheep

中平まみ



ストレイ・シープ　© 1981

一九八一年一月二〇日　初版発行
一九八一年三月二十五日　四版発行

著　者　中平まみ（なかひら）

装幀者　菊地信義

発行者　清水　勝

発行所　株式会社　河出書房新社
東京都渋谷区千駄ケ谷二―三二―二
営業　〇三―四〇四―一二〇一
電話　編集　〇三―四〇四―八六一一
振替口座（東京）〇―一〇八〇二

印　刷　株式会社亨有堂印刷所
製　本　加藤製本株式会社

落丁・乱丁本はお取替えいたします

本名・中平真実（なかひらまみ）
映画監督中平康の長女として
東京に生まれる
青山学院高等部卒
武蔵野音楽大学ピアノ科中退

ストレイ・シープ

パパへ——

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

エム子は昔から、「何か」になりたいと思っていた。「何か」というのは、女でありながら映画の監督になるとかオーケストラの指揮者になるといった類いのことで、エム子の中に、何か普通ではない特別のことをしてみんなから注目されたいという気持ちは、ずっと以前からあったらしい。

エム子は「そうなった」自分の姿を想像してみる。映画雑誌なんかでみるべべみたいに、コーデュロイの細いスラックスと腰まで隠れるダボッとしたセーターやワイシャツを着こみ、長い髪をキャスケットの中にまとめて、ミッキーマウスの耳みたいなあのキャメラ脇のディレクターチェアに足を組んで座り、煙草を手にしながら、俳優に演技をつけているところ。

あるいは、赤いつややかなスポーツカーで演奏会場にさっそうと到着し、ジョルジュ・サンドみたいに燕尾服か何かに着替え、大きな会場で一本の棒とみずからの身ぶり手ぶりで一大管弦楽団を動かすハイライトシーン。

はたちになった時、エム子は思った。どうしよう、もうはたちになってしまった。あたしはまだなんにもしていない。三島由紀夫のように、フランソワーズ・サガンのように早熟の天才として世に出ること。年若くして華々しくデビューすることに、エム子は憧れていた。

そして、自分はどうやら女優になりたいらしい、ということにエム子が気がついたのもこの頃だった。

すると本当は、自分は大昔から女優になりたかったのだと思えてきた。プロデューサーやディレクターといったつくり手として、人びとに君臨したいなどと思ってみたのも、うしろ側で大本をつかさどる方が、かっこがいいような気がしていたからなのではないか。しかし、「女優になりたい」

なんて口に出すのははばかられた。それは何だか、みっともないことのような気がした。

エム子は急に気がつき始めた。思えばその目覚めの明確な始まりは中学の時だった。フランコ・ゼフィレッリの『ロミオとジュリエット』。それはエム子にとって、それまでのどんな作品よりも強烈な映画体験であり、まわりの現実世界はかすんでしまうほどだった。

衝撃的な、若い主演者二人の新鮮さ。レナード・ホワイティングの、ひきしまったスタイルとす早い身のこなし。少年から青年になりたての、愁いの走ったマスクと熱っぽい表情。その水際立ったロミオぶりは、当時いいと思っていた石坂浩二（俳優にしては珍しく頭が良さそうで、加賀まりこと浮名を流し、黒ずくめの恰好で、横向きに明治の板チョコをニヒルにかじっていた）、その彼をじじむさく、色褪せて感じさせるほどだった。

そして、自分といくつも違わないオリヴィア・ハッセーの鮮やかな登場。

まったく化粧をしていないような、初々しくあどけなささえ漂う少女の顔と、首から下の思いもかけなかった胸の充実ぶり。そのアンバランスな魅力。肩から背中をおおう豊かな長いブルーネットの髪。

その直後、エム子はさっそく髪を伸ばし始めた。バストを豊かにする体操も寝る前にやり出した。そして、髪をまん中分けにしてネグリジェ姿で、エム子は鏡の前でいくつかの印象的なシーンを真似てみた。映画は、十回近く見た。

フランス映画『雨の訪問者』では、小粋で、ソバカスさえもがチャーミングな彩りになっているマルレーヌ・ジョベールを知った。一見無造作にみえる繊細なショートヘア。全篇を通しての白い衣裳。エム子は彼女の写真を切り抜いて美容院にゆき、そのように髪をカットして、デザインパーマをかけた。それから、白いスカートと白いレインシューズと白いレインハットを買った。白ずくめの服装をし、白い靴をはき、白いバッグを持っ

て歩いた。

TVドラマ『兄貴の恋人』では、森和代が気に入った。無愛想に近いくらいの媚びのなさがさわやかで、さっそく同じように、男の子より短かいくらいの思い切ったショートカットにもしてみた。

それらの女優を気に入り、ヒロインの髪かたちなど真似てみる中に、エム子の女優願望がひそんでいた。無意識のうちに、エム子は望んでいた。自分も彼女たちのように画面の中で演じることを。

なりたいと思っていれば、いつかはなれるのではないか。エム子はそんなふうに思っていた。どこかの劇団の試験を受けて養成所の研究生になり、女優を目指そうという気持ちは、ほとんどなかった。怠け者の論理かも知れないが、勉強して演技が身につくというのがどうもピンとこなかったし、そんなふうにして演技がうまくなるということが、エム子には信じられなかった。上手な演技というものが、エム子には何だか、うさんくさいもの

のように思われた。

（だって）とエム子は思う。はたして、昔のリズが、ベベが、モンローが、演技派であっただろうか。彼女たちにあったのは、圧倒的な美貌であり、有無を言わせぬ肉体の魅力ではなかったか。いったい、誰が演技に感心などしただろう。見ている人びとは、その強烈な個性、かもし出すムードにひきつけられたのではなかったか。

カトリーヌ・ドヌーヴがシネ・モンド誌のアンケートで、演技教育＝無、無用と考えていますと答えているのを見て、エム子はますますその意を強くした。またドヌーヴは、女優になるための必要条件は？　という問いに、存在感と感受性、才能は二次的な条件だと思いますと述べていた。

女優こそ、女であることをもっとも生かせる職業、生き方ではないか、とエム子は考える。

人に見られることにより女は美しくなる。スポットライトを浴び、カメ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ラを向けられ、人びとの視線を受け、女優は磨かれ、光り輝く存在になってゆく。見られているという意識、緊張感。それこそが女を美しくする一番確かなものであろう。

女として生まれた以上、出来るならば女優になりたい。というよりなるべきだとすら、エム子には思えてくる。

女優になりたいなんて、全然思わない。そんなこと、考えたこともないという女がいたら、それは多分不正直か、嘘をついているか、それとも初めからあきらめているかだとエム子は思う。

女優になりたいというエム子の気持ちは次第に昂じていったが、事態がそれらしく動きそうな気配はまったくないまま、はたち以後の日々は過ぎてゆく。

よく耳にするパターン。誰かが自分の写真を送ってしまったとか、スカウトされたとか、まったくの偶然から女優に「なってしまった」という話

などきくと、エム子にはお伽話みたいで信じられないような気がした。
しかしそのいっぽうで、本当は、そんなタナボタ的キッカケ、シンデレラストーリーこそが、女優誕生にはもっともふさわしいという気もしていた。
「エムちゃん女優にならないの？」「エムちゃんなんか女優になればいいのに」。何もご存じない人たちがそんなことを言うたび、表面は興味なさそうなそぶりをしながら、エム子は「なまじっか」、パパが映画監督であることの皮肉さを感じるのだった。
みんなの言うことはいつも的外れだった。小さい頃は、「エムちゃんち俳優さんが沢山くるんでしょ？」と、よく言われた。その頃、もうとっくにパパはうちを出ていた。それ以前、うちへきた俳優でエム子が覚えているのはイズミマサコだけだった。
パパとはほとんど会うことはなかったが、会ったとしても、「女優にな

りたい」なんて、とても言えたものではないとエム子は思っていた。たちまちパパは冷笑するだろう。「何馬鹿なこと言ってるんだ」。第一、恥を覚悟でもし言ったとしても、何もどうにもならないことくらい、エム子は知っているつもりだった。

昔も今も、エム子が女優にならないのは、なれないからなのだ。しかしそれなら、エム子はいったい何になればいいのかあるいはなれるのか。何をすればいいのかあるいは出来るのか。

エム子は、いつも疲れていた。それは、アリナミンAとかQP80を服んでも治る類いのものではなかった。

エム子が疲れているのは、何もすることがないからだった。

朝起きて、オレンジジュース、パン、ミルク、ヨーグルトの朝食をとり、朝日と日経の二つの新聞に目を通すと、エム子には、もうたいしてすること

ともない。

行かなければならないところもない。どこかへ出かけようとさえ思わなければ、一日じゅう寝巻を着たままでもすんでしまう。それが、いつ果てるともない日常だった。

時間ばかりがある中での、暇にまかせてのとりとめのない考えごとや、思い煩い。

やがて、夜がくる。床に入って目を閉じる一瞬、いつも（ああ今日もまたこうして過ぎゆく）という想い。時計のネジを巻き、星占いで明日の運勢を読み、スタンドを消し、エム子は考える人から眠る人になろうとするが、眠りの最中すら、エム子には心安らかな時間ではない。毎夜眠りとともにやってくるのは、気骨のおれる夢であった。

夢というものの常で、出演者の顔ぶれや内容は奇妙で、説明のつかないものではあったが、そこにはいつも過去が下敷きとなり、現在が投影され

ていた。エム子は夢の中でも、やはり屈託をかかえたエム子自身を演じている。つまり、夢と現実を同じ扮装、役柄で往き来しているようなものだった。

朝方、水中に潜っていた体が急にふわっと浮き上り、ぽっかりと水面に出てしまうように、夢間を漂っていたエム子は、夢が突然遠のき、やがて眠りが徐々に没収されてゆくのを感じる。

そして、岸辺にうちあげられた魚みたいに、身動きせず、横たわっている自分を意識する。

外の明るさを体で測る。ようやっと薄目を開ける。朦朧とした意識で、時計の二本の針の在りかを、しばらくかかって確かめる。それから、徐々に起きる態勢に移行してゆく。毎度のことながら、体を水平から垂直にもってゆくのは努力を要する作業だ。

朝の気分は概して、灰色の厚い雲に覆われたような曇天。(ああ、また

朝がきてしまった)。

今日も元気だ頑張ろう式の建設的生産的向上心、健全な気構えなど、この数年来感じたことがない。

日中も頭の中はたちこめた靄で見通しがきかなくなったような不透明さがあり、頭の重さと眠気は、濃い緑茶や紅茶を飲んで脳神経にカフェインを送りこんでも、消え去らない。

「あんたみたいな人は、土方仕事みたいな肉体労働でもするといいんだわ、そうすれば、夢もみないでぐっすり眠れるから」と母は言った。

三年前、エム子がオーディションに合格してTVに出ることになった時、母は泣きそうなほど喜んだ。さんざんこの子には手を焼かされ、苦労させられたけど、やっと何とかなってくれたと思ったのだ。

それがあんな結果に終わり、母はエム子以上に、どん底につき落とされ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.